



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.108
2012.9.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

阿玉台式土器 - 東関東に花開いた特異な中期縄文土器 - 塚本師也

第3回 阿玉台式土器の研究史(1)

阿玉台式土器は、飯島魁・佐々木忠次郎による陸平貝塚の報告で既に図化され、他の中期縄文土器とともに「厚手式」とされた(I.Iijima・C・Sasaki 1883)。八木英三郎・下村三四吉は、標準遺跡の千葉県阿玉台貝塚を発掘する。この報文では加曽利E式とともに、「陸平式」とされた(八木・下村1894)。縄文土器型式の編年研究が推進される頃には、八木・下村が報告した阿玉台貝塚発掘の土器が一型式として認識されたようである(八幡ほか1932、山内1928)。1936年の武蔵高等学校裏石器時代遺跡の竪穴住居址出土土器の相伴関係から、勝坂式との並行関係が把握された。そして、西村正衛による利根川下流域における一連の貝塚調査により、阿玉台式の内容、細別が確定し、今日に至っている。

阿玉台式土器の研究史全体を扱ったものとして斎木勝の論考がある(斎木1984)。1970年以前の研究については西村正衛の論考に詳しい(西村1972)。紙数の関係があるため、詳細はそれらの論考を参照していただくとして、ここではいくつかの視点から阿玉台式土器の研究史を取り上げる。

今回は、研究の初期にどのような土器を阿玉台式土器と認識していたかを取り上げる。八木・下村による阿玉台貝塚探究報告(以後八木報文)掲載の実測図を観ると、阿玉台Ib式、II式、III式、IV式と加曽利E式土器がある。後年山内清男は、「最近になって八幡君は姥山貝塚の発掘土器のうち阿玉台(八木氏報告)に多い土器を一型式として指示した。これは『阿玉台』として僕等の間に通用して居る。」と記した(山内1928)。八木報文に多い土器、即ち八幡一郎が指示した「阿玉台」を姥山貝塚報告で検討してみる。第4類(爪形紋土器)、第5類(紐状紋土器)および第6類(縁帯紋土器)が「第2群 阿玉臺式」である。第4類は阿玉台Ib・II・III式、第5類は阿玉台Ib・II式、第6類は加曽利E式である。八木報告にある阿玉台IV式土器が姥山貝塚報告では欠落する。もっとも、姥山貝塚報文では阿玉台IV式土器が未掲載である。八幡一郎が指示した「阿玉臺式」は八木報告の土器にほぼ準じていることが判る。阿玉台式は、勝坂式と同層位、加曽利E式の上層から出土したことを記しながら、阿玉台式は勝坂式が「萎縮退嬰したもの」と仮定し

た。大山史前学研究所は、霞ヶ浦周辺で阿玉台式土器を出土する宮平貝塚、竹来根田貝塚を発掘調査した。竹来根田貝塚の報文では、阿玉台貝塚発見のものの一部に類似する土器を「第一群土器」、勝坂遺跡に主として発見される「狭義の勝坂式土器」を「第二類土器」とした(大山・大給・池上1937)。第一群土器の内容は阿玉台Ib・II式土器である。第二群土器は、現在の勝坂式土器は僅かで、大半が阿玉台III・IV式土器である。つまり、大山史前学研究所による「阿玉台式土器」は、主に阿玉台Ib式とII式を指している。同研究所に一時在籍した甲野勇による阿玉台式土器は、阿玉台Ib式とII式を中心として、一部阿玉台III式を含んでいる(甲野1935)。後年、西村正衛が、阿玉台式土器の「古くからの一般的概念」を記すが、その内容は阿玉台Ib・II式を指すものであった。

八幡一郎の「阿玉臺式」土器は、八木報告の土器にほぼ準じている。一方、大山史前学研究所の宮平・竹来根田貝塚の報告以降、阿玉台Ib・II式土器が「阿玉台式土器」と認識されるようになったと思われる。

【参考文献】

- 大山柏・大給尹・池上啓介、1937、「茨城県稲敷郡舟島村竹来根田貝塚群調査報告」『史前学雑誌』第9巻第4号、史前学会
甲野勇、1935、「関東地方に於ける縄紋式石器時代文化の変遷」『史前学雑誌』第7巻第3号、史前学会
斎木勝、1984、「研究史 阿玉台式土器」『奈和15周年記念論集』、奈和同人会
西村正衛、1972、「阿玉台式土器編年研究の概要—利根川下流域を中心として—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第18輯、早稲田大学大学院文学研究科
八木英三郎・下村三四吉村、1894、「下総國香取郡阿玉臺貝塚探究報告」『東京人類学会雑誌』第9巻97号、東京人類学会
八幡一郎・宮坂光次、1932、「下総姥山ニ於ケル石器時代遺跡」東京帝国大学
山内清男、1928、「下総上本郷貝塚」『人類学雑誌』第43巻第10号、東京人類学会
I.Iijima・C・Sasaki、1883、Okadaira Shell Mound at Hitachi.University of Tokyo

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

■阿玉台式土器	阿玉台式土器の研究史(1)	塚本師也 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイバレット・サイト(第101回)	石堂和博…3
■考古学の履歴書	良き師・良き友に恵まれて(第5回)	渡辺 誠 …2	■考古学者の書棚	『もう二つの日本文化』	関根章義…4

考古の履歴書

良き師・良き友に恵まれて (第5回)

渡辺 誠

6. 恩師のプロフィール

大学院での指導教授は、慶應では2人体制であり、私にとっては松本信廣教授が正、前嶋信次教授が副指導教授であった。松本先生はソルボンヌ大学で学位を取得された方で、ポール・ペリオの弟子である。先生は言葉使いのやさしい方で、御指導も同様であった。そして強制されることもないままに、次第にその考え方に染まっていくような感じであった。

慶應の考古学が東洋史に重要な力点があるのも、先生のお考えが反映されている。当時は、民俗学・言語学・考古学などの、伝統的な文献史的な歴史学とは相いれない研究をするなら東洋史という雰囲気であった。江坂先生も当然東洋史への進級を望んでおられた。

松本先生は、島国のわが国に文化が伝わるといっても、大陸から船なしで伝わるはずがないのだから、船の研究はきわめて重要なのだと教えられ、かつ実践されてきた。一時丸木舟の発掘が慶應のお家芸みたいな時期があったが、低湿地を発掘する資金の調達ともからんで、松本先生の貢献にはきわめて大きいものがある。しかしその成果は、国史の清水潤三教授によって『船』と題してまとめられ、法政出版の「ものと人間の文化史」シリーズのなかに収められている。

そして私にとってもっとも大事なお教えは、学生生活を終える時に、世間は大事だが勝手なこともあり、一貫した考え方を維持していても、私は時には右、時には左と言われてきたが、君はこれから研究を深め、確たる自分の考え方を確立し、世間に振り回されないようにと諭された。このお言葉は、以来私の座右銘となっている。当時の新聞の読者欄にアメリカの北爆反対を投稿しておられ、若い先生方が松本先生の政治好きには困ったものだとおっしゃられたことも記憶している。私個人には、これでアメリカ留学は難しくなったね、と言われたことがある。

ハノイにフランスの極東学院があったことも、お考えの一部には含まれていたことであろう。そして東南アジア史にも造詣が深く、銅鼓にも深く関心を寄せていた。そのため九州大学へ小田富士雄先生を訪ねた時も、岡崎 敬先生から帰りにはかならず私の部屋に寄るよといわれ、銅鼓についての最新情報をお聞きし、暗に松本先生への報告を示唆された。しかしこのような考古学がらみのことは少なく、大林太良・吉田敦彦といった民俗学や神話学の先生方に、松本先生の教え子ということで、大事にして頂けることが多かった。

とりわけ吉田先生は、『縄文時代の神話学』という著書に代表されるように、縄文時代の宗教関係遺物に深い関心を示され、次々と独自の研究成果を発表されて、その勢いは現在も続いている。特に釈迦堂遺跡の土偶などに代表される山梨県下の資料には、特に深い関心をもたれていた。

名古屋大学で教授になった頃、同大学ではあまり関心の高くなかった文化人類学の講義をして頂くために、大林太良先生に電話でお願いしたところどうしても無理であるが、吉田敦彦先生にお願いしてみてもどうかということであった。私はまだ一度もお会いしたことがなかったが、縄文文化への高い御見識を承知していたので、厚かましくお願いし集中講義をして頂いた。以来御教示頂くことが一段と多くなり、人面・土偶裝飾付土器の研究に深み加え

ることができた。

副指導教授の前嶋信次教授は著名なイスラム学者であり、私達には主に東西交渉史を講義された。そしてある時出来立てだよと言いつつ「タラス戦考」の別刷りを下され、主題である中央アジアのタラス河畔の戦いについて講じられた。史上この戦争がきっかけとなって、唐は中央アジアから撤退することになるのだが、そのこと以上に重要なことがある。

この時に紙漉き工が捕虜となり、サラセンに紙が伝わり、さらにヨーロッパへも伝わることになったのである。君達が無意識のうちに、研究上大変お世話になっている恩人ともいべき紙の、これくらいの歴史はよく知っておくようにと教えられた。

このことが私の頭の中で目を覚ますのは、それから約30年後のイタリア・ポンペイ遺跡の発掘調査に参加した時である。ポンペイに近いアマルフィ海岸には、アジアから伝わった紙漉き技術が伝えられていた。ここへは現場責任者の江谷 寛先生に初めて連れて行って頂いた。風光明媚な海岸である。そして遺跡に現れた岩井経男・弘前大学教授に無理を頼み、再度取材に訪れた。イタリア語が分からない私にとって、天使が舞い降りたようなものである。そして幸いにも、唯一ともいべき伝承者のガブリエール氏に会うことができた。

詳細は省略するが、日本とヨーロッパの紙の資質の大きな違いを知ることができたのは、大収穫であった。そして日本紙も、中国伝来の紙を大きく改良したものであることを再認識できたのである。日本紙の重要な特徴は、薄くて大きく、白くて美しいことである。

まず薄く漉くということは、溜め漉きではだめで、流し漉きでないとできない。しかし古代中国にも流し漉きはなかった。そして次々と重ねていくが、くっついたりしない。これは相互反発性のあるトロアオイなどの練り材を溶かし込んでいるからで、現在私達が当たり前前にみている紙漉きは、古代日本人の優れた発明なのである。

また大きく漉けるということは、スノコの軽さと関係がある。しかし竹細工の発達していないイタリアでは、その材料が真鍮の針金である。そのためスノコは約40cm程度の広さしかない。ガブリエール氏はその一枚一枚を厚いネルの布に挟み、加圧機で脱水していた。後日ダビンチのエッチングを展覧会でみることもあったが、大きい紙も実はこのようなサイズのものをつないでいるのであった。

それでもアジアから紙が伝わると広く伝播し、大きな影響を与えることになった。西洋美術館の館長であった高階秀爾は、このことを抜きにしてルネッサンス文化はあり得ないと述べているほどである。なおそれ以前は、羊皮紙やパピルス紙であった。

アマルフィへは、第五次十字軍によってもたらされた。アマルフィは当時重要な造船基地だったことが大きく関係しているとみられる。そしてその前には、タラスの戦いがある。戦の度に広がっているこ

略歴
昭和13年11月18日 福島県平市大町(現いわき市)に生まれる
昭和32年3月 福島県立磐城高校卒業
昭和33年4月 慶應義塾大学文学部入学
昭和43年3月 同上大学院博士課程修了
昭和43年4月 古代学協会平安博物館勤務
昭和54年8月 名古屋大学文学部助教授
平成元年4月 同上教授
平成14年3月 同上定年退職、同上名誉教授
平成15年4月 山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)
平成18年7月 日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

とは、僧侶が高句麗から伝えたという伝承しかもたないわが国とは考え方の違いを生じてくる。紙は軍事作戦の命令書や記録として重要で、かつ大量に必要である。しかもその素材である麻は、戦死した兵士の軍服からも調達されることになるのである。

したがって紙漉き工は、道具一式を担いで従軍することになる。山里の風物詩としてしかみていないわが国では考えられないことである。しかし隣国の韓国では、移動する紙漉き工のことが記録されている。

前嶋先生の蒔かれた種の一粒を、ようやく開花させることができ、嬉しく思っている。

松本先生を副とし、前嶋先生を正としてアラビア学を研究したのは、同級生の家島彦一氏（元東京外国語大学教授）である。

そして船についても造詣が深い。1997年に韓国でクラス会を開いたが、韓国西海岸新安の沈没船を見学し海洋博物館を訪問した。それまでこの陶磁器を沢山積載した船は、バイキングの船の構造と同じだということが、一般的な考え方であった。しかしその特徴であるクリンカー（鎧板）張りは、北欧と東洋の中間に位置する

アラビア世界には、中世にはまったく見られないということであった。

そして海洋博物館のもう一つの目玉である高麗船に、その先行形態のあることが確認された。すなわち北欧のバイキングとはまったく関係がなく、東アジアのなかに原型があることになる。そうなると、13世紀後半の文永・弘安の役の事情が問題になってくる。済州島などで日本攻略のための船が大量に作られたが、この時に高麗の造船技術が中国へ伝わり、その延長上に新安船が位置していることになる。

元の意図は果たされなかったが、中国南部を出発した江南軍は、イスラム人の蒲寿康配下の世界最強の海軍であった。元は騎馬民族だから海戦に弱かったとか、中間の高麗の人民の抵抗があったからだという陳腐な階級闘争史では理解が難しいことがはっきりしてきた。

旧交を温めたり、研究の進展があったり、楽しいクラス会であった。

しかしこうした案内ができるようになったのも、江坂先生に何度も連れて行って頂いたお陰であり、項を改めて記すこととする。

隔月連載です。今回は石井則孝先生です。

レイエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 101

種子島 国史跡広田遺跡 ～ 鹿児島県南種子町

石堂 和博

種子島に生まれた私にとって、広田遺跡は、子供の頃からその存在を知っていた遺跡です。

広田遺跡は、鹿児島県種子島の南部、太平洋に面した全長約100メートルの海岸砂丘上につくられた弥生時代後期後半から7世紀にかけての集団墓地です。調査は、1957-1959年度に国分直一・盛園尚孝・金関丈夫氏らによって行われ、合葬を含む90箇所の子供の埋葬遺構、157体の人骨、及び44,000点以上の大量の貝製品が出土しました。埋葬の時期は、大きく上層期（古墳時代後期～7世紀）と下層期（弥生時代後期後半～古墳時代中期）の二期に分けられています。上層期の埋葬人骨は、石囲の中に集骨された二次葬で、貝製品が副葬されていました。一方、下層期の埋葬人骨は一次葬で、貝輪・貝玉類・貝符（下層タイプ）・竜佩形貝製垂飾・二孔板状貝製品・有孔円盤状貝製品と呼ばれる多量の貝製の装身具を身に付けていました。

これらの多彩で多量の貝製装身具にみられる貝文化が、この遺跡の大きな特徴です。人骨の形質学的な研究からは、広田人は



発掘風景

平均身長が成人男性で約153cm、女性で約142cmという極めて低身長の集団で、主に上顎の側切歯を片側のみ抜歯する独特の抜歯風習をもつことがわかりました。また、頭蓋骨を人為的に変形させる習俗をもっていた可能性が指摘されています。これらの特徴は、日本列島の古人骨の中に類例がありません。

2005-2006年度に、南種子町教育委員会が行った発掘調査には、私も調査員として参加しました。この調査では、広田砂丘の北側で新たな墓群（北側墓群）がみつき、この墓群は、覆石墓を中心とすることや土器を供える習俗など、種子島の他の墓地遺跡と共通する特徴をもっていることがわかっています。

このように、考古学的にみて、広田遺跡は、千数百年前の種子島に独自の文化が開いていたことを伝えるとても貴重な遺跡であることがわかります。

また、広田遺跡は地域の人々との関わりが深い遺跡であり、南種子の人々にとってとてもなじみ深い遺跡です。この遺跡は、1955年に地元に住む長田茂さんが発見し、1957-1959年に行われた発掘調査には、多くの地元の方々が参加しています。長田茂さんは、この広田遺跡の保存と啓蒙に尽力され、広田遺跡公園には、顕彰碑が建てられています。また、長田茂さんの長男、長田弘幸さんは父の熱い思いを引き継がれ、広田遺跡と地域の人々がどのように関わったか、詳細な聞き取り調査を行い、平成23年には「種子島広田遺跡と住民の関わり（証言者達の声）」という冊子にまとめられました。

調査に参加した地元の向井長助さんは、国分直一・金関丈夫氏などの一流の歴史学者と接しながら発掘を行ったこと、そしてなにより、自分が日常生活を送っている空間の下から、すばらしい遺跡が発掘されたことに感動しました。そして向井さんは、地域の歴史に誇りをもち、大切に次の世代に伝えることが大事だと考えて、「平山郷土文化保存会」を立ちあげました。後に、この保存会は、この地域独自の郷土芸能を伝承保存するようになり、それらは、国の記録等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択されました。

他にも、当時高校生の向井幸稔さんは、広田遺跡の発掘に参加した感動を「広田遺跡発掘の一日」と題する作文にまとめました。この作文は鹿児島県教育委員会主催の作文コンクールにて県全体で最も優れた10作品に与えられる特選に選ばれています。

調査をした方々に宿を提供した、上妻マリ子・川島恵子さんは、発掘調査に伴うたくさんの出来事が彼女たちの心に深く残っていることを、エッセイ「わたしは旅の人」の中で次のように述懐しました。「私の高校二年の夏休みは、(発掘調査に参加した先生方・考古学徒の)飯炊き、洗濯、掃除婦で終わったが大変な収穫の時でもあった。心の中で古代の人たちと出会い握手したことで種子島をますます好きになった。」

平成の調査に参加された長田睦郎さんは、昭和の調査に参加された兄の長田拓郎さんとともに、平成21年に行われたイベント「広田遺跡であそびビーチ」で、広田遺跡への思いについて発表

されました。

私自身も、広田遺跡と関わる中で、考古学と地域の人々の関わりに興味を持つようになり、考古学で地域おこしをしよう!を合い言葉に考古学徒でつくったグループ「ファンキーファイブ」の結成に参加し、活動をはじめました。

同志社大学の森浩一名誉教授の言葉に「考古学は地域に勇気を与える。」があります。吉野ヶ里遺跡などがそれぞれの地域で人々に勇気を与えたように、広田遺跡もまた、戦後から平成にかけて種子島、南種子に生き、育った人たちに勇気を与えつづけてきた遺跡なのです。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは松原信之さんです。

考古学者の書棚

「もう二つの日本文化 北海道と南島の文化」

藤本強／東京大学出版会(1988)

関根 章義

本書は、日本列島の北と南、つまり北海道と沖縄諸島における文化の成立や特徴について一般向けに書かれた本である。この日本史の教科書や概説書にあまり載らない二つの文化を持つ、日本文化(筆者の言う中の文化)を問い直す際の重要な意味を再確認するというのが本書の主題である。本書の構成は以下の通りである。

I 日本文化と農耕のもつ意味

- 1 日本文化とは 2 農耕の展開と社会 3 気候の違い
- 4 近・現代にもみられる違い

II 北海道の文化

- 1 縄文時代の後の北海道
- 2 北海道の各文化の土地利用からみた生業

III 南島の文化

- 1 貝塚時代後期・グスク時代の南島
- 2 それぞれの時期の遺跡の立地と生業

IV 北海道の文化と南島の文化の共通点

- 1 地理的な位置と環境的条件 2 生業上の特色

V 農耕と社会について

あとがき

本書では、中の文化(日本文化)に対して、もう二つの文化である北の文化と南の文化が形づくられた要因として、農耕(特に水田稲作)があまり発達してこなかったことと、独自のルートで大陸との交易が行われたことがあげられている。これらの要因について、いずれも環境的要因と地理的要因が背景にある。農耕(水田稲作)は気候が原因で、導入はされるがいくつかある生業の内の一つとして行われるため、耕地面積における水田の割合は中の文化のように高い状況とはならなかった。交易は大陸との距離が見方によっては近く、独自に行える素地が整っているため、大陸との窓口にもなっていたことと交易システムを確立していったことにより、文化の独自性を保つことができた。

そういった状況が、北の文化では、縄文時代の後に展開する文化から見られるようになる。特に生業は、遺跡の立地が縄文時代から漁撈を意識する場所に営まれ、それは擦文文化やアイヌ文化にも基本的には受け継がれる形で、大きく影響している。このように、より自然環境に適応して、中の文化とは異なる独自の文化要素を形成してきたのが、北の文化である。一方で南の文化でも、北の文化と同様に、縄文時代の後に展開する文化から独自の

文化が見られるようになる。また、漁撈を生業の中心にする点で北の文化と類似するが、これに南島産の貝の交易が加わることで、貝塚時代後期の文化が独自に展開される。そして、グスク時代には、貝塚時代以来の文化を基盤としながらも、畑作を中心とする生業への転換と積極的な交易を基に、琉球王国の成立という北の文化にはない展開を見せることになる。この琉球王国の交易の実態は、私がグスクの発掘調査に携わった際に、出土した遺物のほとんどが中国や東南アジアからもたらされた陶磁器であることに驚かされ、実際に日本文化の中世遺跡との違いを実感することができた。このように、地理的環境を活かして、交易により独自の文化要素を形成したのが南の文化である。さらに、両文化と中の文化を繋ぐ「ボカシ」の地帯は、両者の接点になるだけではなく、中の文化に取り込まれていくことにより、北の文化や南の文化へ影響を与える存在になる点で重要な位置を占めている。

これまで述べてきたように、本書の特徴は、北の文化・中の文化・南の文化とそれぞれの間にある「ボカシ」の地帯、農耕と交易という観点から、二つの文化の独自性を明らかにし、日本列島の中に複数の文化が存在していることを示したことにある。現在はそうではないかもしれないが、一つと強調されがちな日本列島の文化に対して警鐘を鳴らす意味で示唆に富んだ本である。

私がこの本に出会ったのは、大学院に進学した頃だったと思う。当時から古代の東北地方について研究テーマにしており、畿内を中心として東北地方は周縁という漠然とした捉え方をしていた頃である。そのためか、あたかも中心と周縁の間に明確な線引きがあるかのように感じていた。そのような中で、本書の「ボカシ」の地帯という概念に出会ったことにより、地域を区切って考えていたことに若干の違和感を覚えるようになった。また、「ボカシ」の地帯がそれぞれの文化の交流の場となり、「ボカシ」の地帯の中でそれぞれの文化の境界が行ったり来たりするという指摘に出会ったことが、モノや情報などの動きが中心から周縁への一方向的なものだけではなく、双方向的な動きをしているのではないかと考えるようになったきっかけでもあった。つまり、この本を読んだことがきっかけで、今の自分の研究の方向性が決まったと言える。

アルカ通信 No.108

発行日 2012年9月1日
 発行人 角張淳一
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801
 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp
 URL : http://www.aruka.co.jp